



旧約聖書講解(2)【出エジプト記:救い出し導かれる神様】

本日聖書本文:出エジプト記14章10節—14節・今週暗唱聖句:詩篇18篇1節

説教者:鄭南哲牧師

(Rev.Jung nam-chul)

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！先週一週間も主にあつて平安に過ごせましたか。

<1.出エジプトはどんな御言葉なのか？>

旧約聖書の講解は創世記の本文で始めました。神様はこの世を創造されただけでなく、創造された世界を守り、治めておられる方だけではなくご自分の民に良い事のために介入し、深い摂理の中で道いて下さるお方であると申しあげました。

今日は旧約聖書の2番目の出エジプト記の本文で神様の御言葉を聞いて見たいと思います。出エジプト記は、‘贖い(救い)の叙事詩(じょじし)’ だと呼ばれています。神様に選ばれたイスラエルの民は430年間エジプトの奴隷生活から、神のしもべモーセを通してエジプトから連れ出し、荒野を通して神様の約束されたカナンの地に向かって行く救いの旅程(りよてい)が記録されています。特に出エジプト記は荒野を通過してシナイ山に至るだった3ヶ月だけの旅程だけを記録しています。その後の旅程は民数記と申命記に続けて記録されています。

もしこの出エジプト記のところが単にイスラエルの奴隷生活から解放を話す歴史的な記録だけみるなら、出エジプト記はイスラエルという国の歴史の勉強以上の意味はないと思います。出エジプト記は神様の民を救い出させる事を通して、イエス・キリストにより罪からの贖いを教えてくださる霊的な意味を持っています。

出エジプト記は40章で、主(おも)に二つの部分に分かれています。一つは1-18章までで、ここからは出エジプトしてからシナイの荒野に至るまでの3ヶ月間の旅程が記録されていて、二つ目の部分は19章以後からシナイ山に到着した後、契約を結んで十戒を頂く事や天幕の制度といろんな規定が記録されています。

とつても興味深いところは、創世記の次に来る出エジプトの初めての単語(たんご)はヘブル語で‘ワウ;意味-そして’ という単語です。レビ記にも、民数記にも、申命記にみな同じくこの単語で始まるという事です。つまり、モーセ五書と呼ばれる創世記から申命記までの御言葉は別々の本ではなく一冊の本でつながっている事がわかります。これは何を意味するのでしょうか？神様の救いの御業は創世記から出エジプト記につながり、民数記、申命記までみなつながっている事を示してくれます。これはつまり、神様の救いの御業が一貫性をもって進められている証拠です。

旧約聖書を読むとき、アブラハムがどうしたのか、イサクがどうなったのか、もしくはヨセフはどんな人だったのかなど信仰の人々を調べてみるのも必要ですが、もっと大切なのは彼らを通して働いておられる神様を見つけることです。旧約の出来事、人物、制度などはただ、来られるメシアなるイエス・キリストを表す影に過ぎないからです。

創世記が創造と摂理の神様を表すなら、出エジプト記ではどんな神様を表しているのでしょうか？

<2.本文の背景>

今日の出エジプト記は歴史的な記録ですので、本文の背景を理解する必要があります。創世記の最後の方に出てくるヤコブの家族70人がゴシェン(ラメセス,創世記47:11)に住み着きました。その後、ヤコブとヨセフとその時代の人々はみな死んで、その子孫たちがますます増えていく一方でした。イスラエル人たちはここで430年を住んでる間、70人だった人口が200万人になり、約3万倍増加したのです。

出1:7節では“イスラエル人は多産だったので、おびたしくふえ、すこぶる強くなり、その地は彼らで満ちた。”と書かれています。人口が爆発的に増加するとイスラエル人はエジプトの人々に脅威(きょうい)的な存在になり、イスラエル人の人口を制限するためにエジプト人たちは人口抑制政策(じんこうよくせいせいさく)まで企むことになります。

出エジプト記1章8節に“ヨセフのことを知らない新しい王がエジプトに起こった”と書かれています。この王がパロ王(世界史ではパラオと呼ばれる)でした。もともとパロ(Pharaoh)という言葉は‘宮殿’ という意味です。

世界史ではアフメス(Ahmoses, 1584-1560BC)という王でした。以前のエジプトのヒクソス王朝はセムの系図だったので、ヤコブの家族とその子孫たちを重んじましたが、アフメスから始まったエジプトの王たちはエジプトの本土人(ほんどじん)だったので、イスラエル人々に対する強圧政策(きょうあつせいさく)を取り入れ始めたのです。

モーセが生まれた当時のパロ王はこのアフメスの孫だったトトメス1世(Thutmose I, 1539-1514BC)でした。モーセを育てたパロの娘(ハトシェプスト Hatshepsut)はトトメス1世の1人娘でした。しかしトトメス1世(パロ王)は自分の父より悪く、イスラエル人の労働力を利用して倉庫の町ピトムとラメセスを建てさせ、過酷な労働の日々を過ごさせました。

このような状況において神様はイスラエルの民の苦しみの声を聞き入れ、ご自分の民を救うご計画を成し遂げ始めます。つまり、神のしもべモーセを立たせ、エジプトに行かし、ご自分の民を救い始めます。

モーセが神様の命令に従ってイスラエルの民を救うためにエジプトに行った時のパロ王はまた代わって、アメンホテップ2世(Amenhotep II, 1448-1424BC)でした。出エジプト記7章以下から続けてこの王について繰り返される用語が“パロの心が強情(ごうじょう)であった”です。(7:14,8:15,9:7,35,10:20,27,11:10,14:4) 彼は18歳に王になって約26年間王位についていました。彼が王になる頃が紀元前1448年だとみえますが、イスラエルの民がエジプトを出る時のパロの年はたった20才だったのです。

若かったですが、彼もとつてもかたくなでイスラエルの民をなかなか行かせようとしません。このパロ王がイスラエルの民を行かせようとしないので、神様はモーセをとおして10種類の災いを下し、結局王の家紋および、エジプトの長男たちが亡くなってからようやくモーセとアロンを呼んで、イスラエルの民を連れて出て行くように命じたのです。

このとき、エジプトを出るイスラエル人の数が男子だけで60万人(出12:37)だったので、全体人口は約200万人越えたと思います。そして、ついに紅海(ヘブル語でヤムスプと呼ばれるアシの海の意味)の前につく頃、パロ王の心がまた急に強情になります。すべてのエジプトの奴隷たちがいなくなると、利用する労働力がなくなったことへのいかりや惜しみを感じたパロ王はすべて殺すか、連れ戻すかするためにえり抜きの戦車600と騎馬軍隊を率いてイスラエルの民を追跡したのです。

もうこれ以上イスラエルの民は前に進む事も、うしろに引く事もできなくなり、民はモーセにあらゆる言葉を使ってつぶやきます。(出14:10-12)その状況でモーセが民に言った言葉が今日一緒に読んだ本文の13-14節です。ここで、我々は大切な二つの真理が分かります。

<3.本文の意味>

1)連れ出して下さる神様の導き

13節です。民がつぶやいているとき、モーセは“恐れてはいけない。しっかり立って、きょう、あなたがたのために行われる主の救いを見なさい。あなたがたは、きょう見るエジプト人をもはや永久に見ることはできない。”と言いました。今日の本文は神様の救いへの導きを語ってくださいます。出エジプト記が教えてくださる大切な教訓は‘導かれる神様’です。エジプトを離れる事は初めから計画を立てていたわけでもありません。投票をとおして、意見を集めたのでもありませんでした。モーセの指導力によるものでもありませんでした。むしろ神様がモーセに民を連れて行くように命じられたとき、モーセは“できません”と拒み続けたのです。(出3:11)神様はご自分で、導く出すのだからモーセにはただ“行け!”と言いつづけましたが、モーセはできませんとまた拒みました。

神様はモーセにあなたの杖を投げなさいと命じて、杖が蛇になるしるしも見せて下さいましたが、モーセはそれでも“私は口が重く、舌が重いのです。(出4:10)”と言いながらまたも従えません。神様も、根気よく、人の口を造ったのはだれなのか。ただ、あなたは行くだけでよし、あなたに言う言葉を教えるからと言って説得します。それでもモーセは“できません。他の人を遣わしてください。(出4:13)”とまた拒みます。神様は怒りが燃え上がって、仰せられます。“おまえの兄であるアロンがいるのではないか。(出4:14)”と命じられました。

信仰の家族のみなさん！ 結局出エジプトを導いた方は誰でしたか？モーセが企画した事もなく、いややろうともしませんでした。エジプトのパロ王もなおさらイスラエルの民を行かそうともしませんでした。これらのすべてが表してくれる大切なことは出エジプトはまったき神様の計画であって、神様の導きである事です。“しっかり立って～見なさい”という御言葉は神様が働かれるので、待ちながら見なさいという意味です。主である神様があなたがたを導く出すのだと。つまり、エジプトを出る出エジプトの出来事自体が救いへの神様の導きという意味です。12章51節で“主はイスラエル人を、エジプトの国から連れ出された”と書かれ、13章だけでも 3,5,9,11,13,16,17,18節など、神様が連れ出されたと表現しています。

特に、出エジプト13章21,22節でも、神様は雲の柱と、火の柱で民を導き、出14:1節ではイスラエルの民を引き返し、出14章15節では葦の海を渡るように導き、出14章19節では雲の柱でその道を案内する神様を表せて下さいます。申命記26章8節ではこれを“力強い御手と伸べられた腕”で連れ出したと表しています。出エジプトで出てくる単語は救いへと連れ出す単語です。これらの御言葉をまとめてみると、出エジプトの旅は決して人ではなく、神様ご自身がみずから、ご自分の民を連れ出されたこととなります。

今日の本文でイスラエルの民がまるで自分の力で葦の海を渡らないといけないうにつぶやいたとき、神様はモーセをとおして“あなたがたはしっかり立って、あなたがたのために行われる主の救いを見なさい。”と仰せられたのです。神様が導かれたのです。これらのことを覚えて歌ったダビデの詩が詩篇62篇1節です。“私のたましいは黙って、ただ神を待ち望む。私の救いは神から来る”神様の救いを信じる信仰を表した詩です。その神様が今日も、いまま神様の御民を導かれるのです。神様の導きは救われた信徒たちが味わえる最大の特権であり、祝福です。

2. あなたがたのために戦われる神様

愛する信仰の家族のみなさん！ 神様が我々を導いてくださるなら、イスラエルの民のように試練があり、苦しまれる時があるのでしょうか？ 荒野から約束の地であるカナン地までは直線と言うと2週間あれば入れる距離をなんと40年間歩かせたことに対して、申命記では彼らを低くさせ、訓練させるためだったと言っています。徹底的に神様を信じ、頼らせるためだったと教えています。(申命記8:1-6節)

そして、神様が導くのに関わらず、なぜ彼らの前には障害物があったのですか？ これに対する答えが14節です。神様が導かれる時、我々の前にある障害物を取り除いてくださるのではなく、その障害物を乗り越えるようにさせてくださるのです。今日の本文からの二つ目の教訓は神様が我々のために戦ってくださるということです。これは神様の導きに対する宣言です。(出14:14)

イスラエルの民は自分たちがエジプトの兵士たちと戦わなければならないと思いました。自分たちの前には葦の海があり、後ろにはエジプトの兵士たちが追いかけてきている状況で、イスラエルの民はお墓がなくて荒野で自分たちを埋めさせられるためにここまで連れてきたのかと不平を表しましたが、モーセは我々が戦って問題を解決するのではなく、“神様が我々のために代わりに戦ってくださるのだ”と言い、“あなたがたはただじっと立てればいいのだ。”と民たちをなだめました。神様が我々のために働いてくださっているのにもかかわらず、自分の力ですべてをやらなければならないように踏ん張りすぎる時はないでしょうか。?そういうわけで、ちょっとだけでも苦しみや試練にあったらすぐ落胆し、つぶやく我々の人生ではありませんか。

今日の本文はイスラエルの民がエジプトを出た直後、直面した最初の軍事的対決です。イスラエルの民はその後、神様の約束されたカナンへの征服までの数多い戦闘(せんとう)と戦いを経験します。今日の本文を含めて、これからのあらゆる戦いを通して教えられる教訓はなんでしょうか？戦争での勝利は兵士の人数や、策略への卓越性、武器の性能ではないことです。戦争での勝利は神様の御手にかかっているという事です。神様がともにおられるなら勝利するということです。イスラエルの民が自分たちの力ではなく神様の御力で葦の海を渡ってから歌った詩が出エジプト15章です。“主に向かって私は歌おう。主は輝かしくも勝利を収められ、馬と乗り手とを海の中に投げ込まれたゆえに。。主はいくさびと。その名は主”と歌いました。(出15章1-3節)

イスラエルの民は訓練されてない砂漠の疲れ果てた旅人でした。彼らには戦いの訓練や武器や戦略もありませんでした。彼らには自分自身を守る何の力もありませんでした。しかし、神様を信じたよれば、神様が代わりに戦ってくださるという真理を出エジプトは教えてくれます。自分を本能的に守ろうとする意識をフォチュレスメンタリティ(Fortress mentality)、つまり、城壁意識といいます。時代ごとすべての民族は城壁を作って、自分たちの力で自分たちを守ろうとしました。しかし、イスラエルの民は長らく奴隷生活ばかり経験し、訓練された兵士でもなく、ただ荒野の旅人だったため、自分たちを守ってくれるなんの保護幕がありませんでした。完全にさらけ出されたまま、広い荒野に立っていたのです。ここで、神様はただ、神様のみを頼るようにと命じられたのです。これが、まさに“主があなたがたのために戦われる”という御言葉です。神様が私たちがかわりに戦われます。人間が作ったなにもにも頼らず、ただ主のみを頼らせたのです。

そういうわけで詩篇18篇1節でダビデは“主。我が力、私は、あなたを慕います。”だと告白したのです。主は我が巖(いわお)、わがとりで、我が救い主、身を避ける我が岩、我が神だと告白します。神様のみが我々の唯一の避けどころです。我々のお城を建てるより、神様を頼る事がもっと安全です。時には病気になる、時には挫折し、時には絶望のトンネルと通っているような時があっても、我々を導き、連れ出していかれる神様、我々を鍛(きた)えさせ、究極的には約束の地、恵みの地、祝福の地に連れて行ってくださる神様、その神様を最後まで信じ、頼る私とみなさんとなりますよう切にお祈り申し上げます。アーメン！